歴史地震
第17号(2001) 39-47 頁
受付日 2001/11/19, 受理日 2002/2/27

嬬恋村鎌原における天明三年（1783年）浅間山噴火犠牲者供養の現状と住民の心理

群馬大学教育学部*　　三枝恭代・早川由紀夫

A Memorial Service for Casualties of the 1783 Eruption, Traditionally Held at Kambara on the Northern Flank of Asama Volcano

Yasuyo MIEDA* and Yukio HAYAKAWA*

Faculty of Education, Gunma University, Aramaki 4-2, Maebashi, 371-8510 Japan

Villagers at Kambara on the northern flank of Asama volcano have been holding a memorial service for casualties of the August 1783 eruption. In the village, 477 people were killed by a debris avalanche. Only 93 people survived. The service, an invocation *Namu Amida Butsu*, is held on 7th and 16th days every month in a villager's residence. It is passed to the next house and makes a circuit in seven years and a little. The service goes back to the 33rd anniversary of the eruption, *i.e.*, August 1815. Since then, it has been succeeded for almost 200 years without interruption even during the Second World War. More recently in 1979, a volunteer group was organized in order to guide and treat tourists rushing to Kambara *Kannon* shrine, where two women bodies buried by the avalanche have been excavated at the very base of the stone steps.

§1　はじめに

地震や火山噴火は人々に被害をもたらす．災害の直後は世間の注目がその地域に集まるが，時間の経過とともにその関心は薄れていき，ついには，その地域から災害の記憶が失われてしまう．

群馬県西部，浅間山北麓に位置する嬬恋村鎌原（図1）は，1783年に「天明三年の大噴火」とよばれる災害に見舞われた．鎌原はこの噴火によってほぼ壊滅したが，少数の生存者たちがその場での復興を成し遂げた．鎌原に住む人々はいまでもその災害を忘れていない．彼らは218年前の噴火とそれによって引き起こされた災害を，集団で言い伝えている．

このような例は世界にあまり類を見ないだろう．日を経るごとに，過ぎ去った過去の災害のことなど忘れてしまいがちな今日の流れの中，人々を動かしている原動力は何なのか，人々は何をどう伝えようとしているのか，そして具体的には何を行っているのか，人々は，どのような気持ちでそれらの営みを続けているのだろうか．鎌原観音堂で参拝客に湯茶の接待をしつつ，噴火の様子を説明して，お守り等の販売をしている人たちから話を聞いた．鎌原の家々をまわる回り念仏の参加者からも話を聞いた．

§2　天明三年（1783年）噴火とそれによる鎌原への被害

天明三年四月八日に最初の噴火が起こった．しばらくの静穏の後，六月十八日に田代・大笹・大前・鎌原へ降灰した．六月二十六日から活動が本格的となり，七月二日まで断続的な噴火を繰り返した(田村・早川，1995)．

> 七月六日，八ッ時より頻りに鳴立，きびしき天も砕け地も裂かと皆てんとうす．先西は京・大阪辺，北は佐渡ヶ嶋，東えぞがしま松前，南は八丈，みあけ島迄ひびき渡り物淋しき有様なり．「浅間大変覚書　無量院住職」

と，浅間山は七月六日から特に強烈な活動をみせた．そして，天明三年の噴火のクライマックスである七月七日を迎えることとなる．

> 七日，鳴音前日より百倍きびしく，地動事千倍なり．依之老若男女飲み食を忘れ，立たり居たり，身の置所なく，

* 〒371-8510　前橋市荒牧町4-2
電子メール：hayakawa@edu.gunma-u.ac.jp

浅間の方ばかりながめ居候所，山より熱湯湧出しおし下し，南木の御林見る内に皆燃へ尽す．鹿，犬の類皆焼死す．原も一面の火に成り，目もあてられぬ次第也．天に吹あぐる事百里もあるべきかと云．惣のめぐり石落こと雨の如し．譬て云ば，白熊をふりたてたるごとく，口もとどかず，筆にも難之大焼．「浅間大変覚書　無量院住職」

ここには，地域の住民が飲み食いもできず，不安と恐怖におびえ，生きた心地がしなかったありさまが記されている．自然の圧倒的な力の前にどうすることもできず，ふるえながら運命の七月八日を迎えた．

日，八日大焼の事

八日，昼四ッ時半時分少鳴音静かなり．直に熱湯一度に水勢百丈余り山より湧出し，原一面に押出し，谷々川々押払い，神社，仏閣，民家，草木何によらずたった一おしにおっぱらい，其跡は真黒に成，川筋村七拾五ケ村人馬不残流失，此水早き事一時に百里余りおし出し，其日の晩方長支まで流出るといふ．

此日は天気殊の外吉故，川押し有るべき用心少もなく，焼石降るべき用心のみ致し，各土蔵に諸道具を入，倉に入昼寝致し居，油断真最中，おもいの外にたった一押しに押流し人馬の怪家数を知らず，凡一万七千人と申風聞，実の所未知．此節皆々七転八倒，譬へべき様無之，折節川の方能見る者壱人もなし．命を捨て身物所で無之．

「浅間大変覚書　無量院住職」

とあり，午前10時頃，おそらく強い地震動によって，北側山腹の一部が崩壊して岩なだれが発生した(田村・早川，1995)．この岩なだれは，あっという間に山麓を流れ下り，鎌原村を埋没させてしまった（図2）．

では，嬬恋村の被害状況はどの程度であっただろうか．室町時代に形成された鎌原の集落は，江戸時代には信州と上州を結ぶ交通の要所として栄え，災害以前は，当時の村の平均人口400人に対し，570人を誇る大きな村であった（嬬恋村歴史資料館展示パネルより）．その村が，七月八日の噴火により，わずか93人を残すだけとなってしまった．

表1では鎌原村の死者が，466人となっているが，実際の犠牲者数は，現在鎌原観音堂の入口に３３回忌のときに建てられた供養碑に刻まれている477人だったようだ．この相違は，災害時に受けた火傷やケガのためにしばらくしてから亡くな

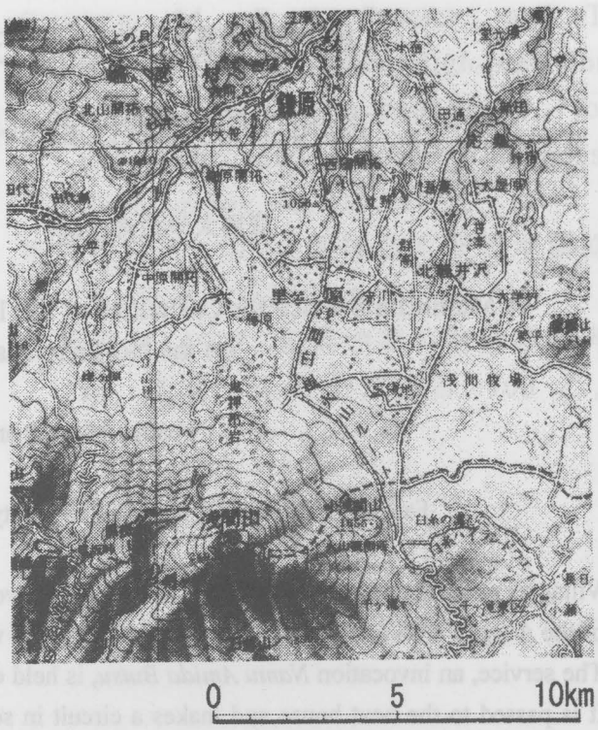

図1　浅間山麓の地形．
国土地理院20万分の1地勢図「長野」

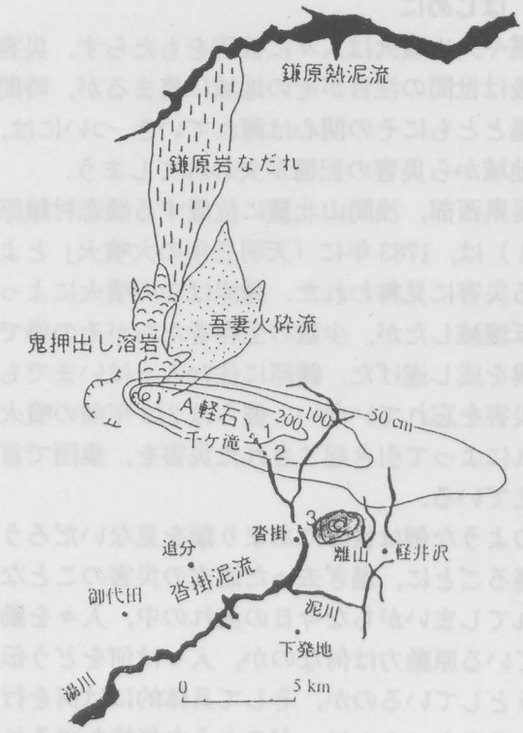

図2　浅間山麓における天明三年噴火による被害．等値線はA軽石の厚さ．田村・早川（1995）による．

表1　鎌原村大字（旧独立村）別被害状況

村名	流家	死者	流馬
大笹村	なし	なし	なし
大前村	15	27（男19女8）	4
鎌原村	95	466（男241女225）	30
西窪村	98	53	29
芦生田村	60	16	10
中居村	29	10（男3女7）	9
袋倉村	23	17	18
赤羽根村	33	14	7
出来村	27	40	7
合計	380戸	643人	114

（嬬恋村史編集委員会，1977）

った人を追加して供養したためかもしれない．

生存者は93名だった（表2）．異常を察知して，村の高台にある鎌原観音堂に逃げたものだけでなく，災害がおさまるように願って観音堂にお参りに来ていたもの，関所の番に行っていて家を留守にしていたものもいたのではないかと考えられる．

この93名は四散せずに鎌原再建の道を選んだ．再建の方法として取られたのは，親を失った子と子を失った親を親子とし，夫を失った妻と妻を失った夫を夫婦にするという家族の作成だった．九月二十四日の第一回の結婚式で7組が結ばれ，暮れの十二月二十三日に第二回の結婚式があげられた（萩原，1982）．こうして新しい家を作り，さらに家と家が協力して村を再建した．

§3　鎌原観音堂奉仕会

地域の人々が先祖の供養や噴火のことを人々に伝えようと組織的に行っている活動に，鎌原観音堂奉仕会がある．

鎌原観音堂奉仕会は1979年に発足した．1979年は，鎌原の地域で発掘調査が行われ，人骨など天明三年当時のさまざまなものが発掘された年である．鎌原のことが日本中に報道されて一躍脚光を浴びた．観音堂に逃げ上がった人のみが助かったことや，観音堂だけが被害を免れたことが，人々の心を引き，参拝客が全国から訪れた．“「人が来てくれるのだから誰かいなくてはならない」と，交代で湯茶の接待をすることを考えついた．当番表を作って次の当番に申し送りをする日誌もできた．この有志の会を奉仕会と呼ぶことになった（清

表2　鎌原村での生存者

職業	名前	一家生残り	流死家族
	清之丞	6人	兄嫁はつ
百姓	三右衛門	5人	4人
百姓	千右衛門	3人	全員無事
百姓	八蔵	6人	3人
百姓	市之丞	5人	1人
百姓	八弥	5人	2人
百姓	与七	8人	2人
百姓	権右ヱ門	1人	5人
百姓	マツ五郎	1人	5人
	ふき	2人	5人
百姓	三四郎	1人	
	ふさ	1人	9人
百姓	長治郎	4人	5人
百姓	半兵衛	2人	5人
百姓	市太郎	1人	5人
百姓	すき	1人	9人
百姓	巳之助	1人	8人
	さよ	1人	3人
百姓	仲右ヱ門	1人	5人
百姓	金四郎	1人	7人
百姓	しめ	1人	1人無事
百姓	まん	1人	5人
百姓	市助	5人	1人
百姓	ろう	1人	6人
百姓	治郎右ヱ門	5人	4人
百姓	まて	1人	2人
百姓	杢右ヱ門	2人	3人
百姓	ふよ	2人	3人
百姓	伊之助	2人	4人
百姓	市太郎	8人	5人
百姓	よく	2人	2人
百姓	杢兵衛	2人	全員無事
百姓	三左ヱ門	3人	4人
		93人	

（鎌原観音堂奉仕会，1992より作成）

水，1982）．全国の人が注目したことにより，鎌原の人々にも先祖のことや土地のことを真剣にふりかえる機運が高まった．

奉仕会が，会則を作ったのは1990年代になってからである．65歳以上の者だけを参加対象としている．「鎌原に在住し本会の主旨に賛同する者」は現在99名．これは，鎌原に在住する65歳以上の約3割に当たる（表3）．参加者を13組に分けて365日交代で当番している．以前は15組あったが，

表3　嬬恋村鎌原の人口割合

世帯数	639戸	
人口	男	908
	女	890
	合計	1798
65歳以上	男	147
	女	182
	合計	329
65歳以下	男	761
	女	708
	合計	1469

2000年8月末日現在

群馬県年齢別統計調査報告書(嬬恋村役場)より

人数が減少したために13組にした．14組にするといつも同じ曜日に当番が回ってきてしまうので，奇数組にしたという．

班長は全員男性である．最年長者というわけではない．班をまとめるだけのリーダーシップが必要なので，それを備えている人が選ばれる．班は，近所の人同士というわけではなく，仲のいい人同士で構成されている．奉仕会に入会するとき，どの班に入りたいか自分で選択できる．ひとつの班の人数が多くなりすぎたら班の数を増やすが，現時点ではそのような問題は発生していない．1班10人と人数が多いが，病弱な人が多いので10人が全員参加できることは少なく，ほどよい数だという．

奉仕会のほかにも，鎌原にはゲートボール・念仏を唱える会などがある．これらの会の参加はすべて自由である．鎌原の高齢者のなかには，すべてに参加している人もいるし，まったく参加していない人もいる．ただ，奉仕会には男性の参加者が少ない．

当番は朝8時か8時30分から夕方4時30分頃まで行っている．参拝客は一番多い夏場で1日400～500人である．賽銭は年間300～400万円くらいあるという．発掘当時は1日で10万円．年間1000万円以上あったという．そのお金は発掘費用にあてられた．現在は観音堂の修復，奉仕会の旅行などの費用にあてられている．

浅間焼け罹災者の供養その他の伝統の行事としては，旧暦の七月八日に当たる日前後に観音堂の前でする供養祭がある．2000年は，人が集まりやすい週末を選んで8月5日（土）に行われた．式典の出席者は，供養のための和讃を唱える人が22人，その他の出席者が40人，式典会場の周りで見ているだけの人や遊んでいる子どもたちが20～30人と，全体で約80人だった．お年寄がめだった．そばにいたひとりの子どもに聞いたところ，「今年初めてきた」「今までこの行事を知らなかった」と答えた．子どもたちの間にこの行事は浸透していないようにみえた．行事の準備は若妻会・老人会・奉仕会の代表者が集まって分担して行われている．

この他に，旧暦の十月九日に当たる日に，伊勢崎市戸谷塚の慰霊祭に参加している．この日は十日夜と呼ぶ日である．この行事は，1950～55年までは，鎌原で行われていた．各家庭の前に案山子を立てて，餅を供える．そして，乾燥させたミョウガを稲で包んで棒を作り，子どもたちが歌に合わせてその棒をたたき回る．これは，今年一年無事に過ごせたのもこの案山子が身代わりになってくれたという意味だそうだ．

戸谷塚には浅間焼けのとき利根川を流れ下った遺体が何百と打ち上げられた．その後夜な夜な人のすすり泣く声が聞こえ，眠れない日々が続くようになったという．そこで，地蔵尊を建てて供養をした．その建立に際して鎌原でも寄付を集めた縁で交流が始まった．奉仕会の人々は，戸谷塚で手厚い歓迎を受ける．慰霊祭に参加した後，公民館で戸谷塚の人といっしょに昼食を食べ，太田市中野（ここにも慰霊碑がある）に立ち寄ってから温泉宿に行って一泊する．レクリエーションの要素もつよい．これには鎌原区の役職も参加することになっていて，鎌原と戸谷塚の地区間交流の意味も含まれている（この段落の記述は，70代の女性から聞いた話による）．

奉仕会の総会は，隔年で行う．年長者15人に品物を贈り，80歳の人を表彰する．90歳の人には金一封を贈る．役職の年俸もこのとき支払う．表彰や金一封のために長生きしようと頑張る人もいて，生きがいのひとつになっている．

役員選挙も総会のときに行う．最近は役職につくと負担が大きくなるので，後を引き継ぐ人がいなかったり，皆をまとめるだけのリーダーシップをもった人がみつからないなどの理由から再選されることが少なくない．

では実際に，奉仕会で活動をしている人々はどんな理由で奉仕会に参加して，どのような気持ちで活動を続けているのだろうか．人々を動かしている原動力は何なのか．奉仕会参加者に話を聞い

た.

「入るきっかけは知り合いに誘われて入るのが一番多い(同じ組にしてもらう).友達と同じ組にはいれるということで,入会するときの抵抗は少ない.旅行とおしゃべりが楽しみで奉仕会に入っている.観音堂に行くと,同じ組の人が昼食を用意してくれるので,それを食べに行くのが楽しみ.」(70代女性)

「日々一生懸命働いているから,観音様のところに行けば休めるという気持ちがある.息抜きになる.」(60代男性)

「奉仕会の旅行や,みんなで集まるのは楽しみ.みんな仲良しなので楽しい.」(80代男性)などとみんなで集まることに楽しみを見出している人が多い.みんなで集まり和やかな空間がつくられている.その証拠にこんな話をしてくれた人もいた.

「奉仕会は楽しい.他の地域の人で奉仕会に入りたがる人もいるが,そんな時は鎌原に住んでくれるようになったら歓迎するよって言うんだ(笑).この楽しく温かい雰囲気がいいらしい.奉仕会は家庭とはまた別の楽しみがある.」(60代男性)

囲炉裏を囲み,皆で酒を酌み交わしている日もあった.お昼も皆で作って食べる.材料は観音堂にあるものを利用する.その材料は奉仕会の費用で購入されている.ノートがあってそれを持っていくと付けで買い物ができ,月末に会長が精算する.

楽しみを求めてではなく,特に理由もなくという人もいた.

「奉仕会に入会した理由は,65歳になったから.みんな定年を過ぎたりやる事がなかったりして暇になったからというのもあるが,65歳になったら入るのが当たり前になっている.だから周囲の人も"○○さんが65歳になったから"と,65歳になった人を次々と誘う.」(60代女性)

そうはいっても,どの人も供養の気持ちが心の奥底にあるようだ.

「奉仕会に入会した理由は,先祖の供養.噴火の犠牲者は自分達の8〜9代前の先祖であり,村の住民の8割はその末裔.また,噴火のとき,観音様のもとに来た人のみが助かった.観音様が身代わりになってくれた.だから,観音様には敬意がある.その大切な観音様を毎日みんなでお守りしているという気持ちがある.」(80代男性)

「観音様に敬意があるので,奉仕会に入らない人はまずいない.80歳くらいの人では2,3人入っていないないだけ.一家で,たとえ夫は入らなくても妻は入るという形でほとんどの家庭が入っている.」(70代男性)

自分達の先祖の供養という気持ちは,どの人も口にした.先祖を助けてくれた観音様への深い敬意を口に出す人もいる.

「奉仕会を"村おこし"の参考にしたいと訪れた人もいた.しかし,他の地域ではそう簡単にはいかないらしい.この土地では観音様に対する敬意がみんなの中にあるから,その気持ちで団結している.みんなの目指すところが近い.奉仕会以外の人でも支えてくれる人が多い.だからうまく行っている.ひとり一人の目指すところが違うと,つよいリーダーシップを持ち合わせた人が必要となる.しかしそんな人はなかなかいない.だから難しい.」(80代男性)という人もいた.

「現在の奉仕会の人々は発掘に携わっていた人が多いから供養の気持ちが強い.」(60代男性)という声もあった.発掘に携わったとき,自分の目で遺骨を見ているから,先祖の供養をしたいという強い思いがある.だから,65歳になったら奉仕会に入って協力するのが当たり前という考えも生まれてきている.この鎌原で生まれ育っているから,この土地への執着心が強い.しかしこのような考えを持っているのはいまのお年寄の代までである.

「若い人は噴火のことを詳しく知らないと思う.学校の授業でもしない.祖父母から話を聞くくらいしか知る機会がない.遠くからやって来る人のほうが,パンフレットや館長の話により詳しく知っている人が多いのではないか.供養の気持ちや,噴火に関する気持ちはだんだん薄れていくのではないか.」(70代女性)と,現状に不安を感じるとの声も聞かれた.

§4 回り念仏

観音堂奉仕会のほかに組織的な供養を行っている特徴的なものとして,"回り念仏"がある.これはその名の通り毎月7日と16日に家を回る,浅間焼けによる犠牲者の霊を慰めるために念仏を唱える習慣のことである.

「なぜ月2回なのかは言い伝えられていない.なぜ7日と16日になったのかもわからない.」(70代女性)

回り念仏は,村中の家々を会場として,諸仏具

とともに隣の家へと持ち回りとなるのでこの名がついている．7 年余で村を一周する．開始時は古記録に残っていないが，長老によれば，現在の鎌原観音堂敷地内にある流死者三十三回忌供養塔設立時(文化十二年七月八日)に念仏講が発願され，生き残った人を慰め，亡き人をねんごろに供養するよう，家々を回ったのが始まりだという．戦時中もほの暗い明かりの中で続けられた．

回り念仏は，家々の事情や信仰する宗派が異なってできない家庭も多くなり，さらに戦後は農業や養蚕で生計を立てていたので夏の繁忙期には中断することになった．現在では正月の 7 日，農繁期である 8 月の 2 回，9 月の 7 日を休み，年 20 回行われている．各家庭を持ち回りするのが基本だが，当番の家庭で不幸があったり，病人がいたりする場合，信仰が違う場合，念仏に抵抗がある場合などには，その家庭を抜いて次の家庭へ移っていくことになっている．昭和 40 年代までは夜に行われていたが，念仏の帰りに交通事故にあった二人の命が失われて以来，昼に変更された．現在では 10 時くらいから 15 時くらいまでの間で表 4 のようなプログラムで行われている．

時間はおよその目安である．大幅にずれる事はないが，人が揃ったら始めるので毎回微妙に違う．リーダーが右上座に座る．その人が一節唱えたところから念仏が始まる．和讃では，鈴や鐘の音とともに歌い上げられる．全体の約半数の人が鈴や鐘を手にしている．途中涙する人もあり，厳粛な雰囲気の中で行われている．参加者は老若男女を問わないが，平日休日にかかわらず 7 日と 16 日に行われるので，どうしてもお年寄の女性が多くなってしまう．毎回 30 人前後のお年寄の女性が集まって行われている（図 3）．

浅間大和讃は明治 42～43 年に作られた(付録)．そのほかの和讃はだんだんと増えていった．作詞・作曲・制作年がわかるものについては記した．念仏は，いま鎌原にある寺の宗派，曹洞宗バイカ流のものである．天明三年当時とは宗派が変わっている．以前は真言宗金剛流であったが，観音山から来て念仏を指導してくれていた僧侶が亡くなったことと，鎌原の檀家のほとんどがいまはバイカ流であることのために，バイカ流の念仏があげられるようになった．念仏には，回り念仏だけでなく，葬式のあった家で葬式の日の夜にあげる弔い念仏もある．

表 4　回り念仏のプログラム

9：00	人々が集まり始める
10：00	念仏開始
	1. ざんげ文
	2. 般若心経
	3. 舎利礼（一身頂礼）
	4. 光明真言
	5. お念仏　13 仏不動釈迦
	6. 弘法大師和讃
11：30	昼食
12：30	午後供養
	7. 呑龍和讃　昭和 54 年
	8. 秋葉様和讃
	9. お茶和讃　昭和 54 年
	10. 浅間大和讃
	11. 鎌原観音堂御詠歌
13：10	休憩
13：30	和讃ふたたび開始
	12. 戸谷塚地蔵尊和讃
	13. 善養寺和讃　昭和 50 年 7 月
	善養寺名取盛雄作詞
	14. 入定和讃
	15. 水子地蔵和讃
	作詞：赤松月船，作曲：遠藤実
	16. おわかれ和讃
	17. 善養寺和讃
14：30	終了

図 3　回り念仏

回り念仏の当日の家では山菜や豆などの煮物，野菜の天ぷらとうどん程度の手作りのごちそうや，四季折々の果物菓子などを正面座敷に飾る．中央に十三仏像軸，右に天明の災害で亡くなった先祖の本名と戒名を書いた掛軸，左に弘法大師座像軸を供え，線香・灯明を手向ける．これらが，持ち回りする仏具である(表 5)．

休憩時には，その家の家族や近所の人々が参加者にごちそうを出して苦労をねぎらう．手間と経済的な理由で昼食のメニューを 1999 年から減らした．その際には，念仏は村の重要な事業のひと

表5　回り念仏で持ち回る仏具

仏具の入っている木軸棚1段
掛軸3本…流死者477名の名前，及び戒名の軸1本
13仏像軸　1本
弘法大師座像軸1本
鐘　1器
槌　2本
香炉　1台
灯明台　1対
花瓶　1対
掛軸を入れる細長い木箱　2本

つであるとの考えにもとづいて，区長に働きかけて皆を集め，決定した．現在の基本はうどん・天ぷら・漬物・煮物・煮豆の5品となっている．以前はこの他に赤飯などをふるまう人もいた．これらを作りふるまうのは嫁の仕事であり，仲のよい近所の若妻たちが手伝う．念仏終了後，参加者が引き払ってから，この若妻たちだけでお茶を飲み，デザートを口にして，ひとときの団欒の場を設けている．

念仏を唱えることには高い関心が寄せられていて，回り念仏だけでなくその練習会も行われている．

「自分がうろ覚えだったから，空で唱えられる人がいるうちに私も覚えて，みんなで本気で供養しようと思って．」(70代女性）という呼びかけに応じて1997年に始めた．7月8月以外の月に，念仏の練習会と和讃の練習会がそれぞれ月2回ずつ行われている．和讃には80代の女性を，念仏には鎌原の寺の住職の妻を講師に迎え，夏は夜7時から，冬は午後1時から鎌原区多目的センターで行っている．練習会には50歳前後の人も参加しており，回り念仏には参加できないが練習会だけ参加するという人もいる．練習会の参加人数は平均15人．回り念仏に参加している人で練習会にも参加している人は約1割である．空で唱えられるようになってくると練習会には参加しないようになる．練習会は次世代の念仏を唱える人を育成する場所になっている．

和讃の練習が月2回，念仏の練習が月2回，実際に唱える回り念仏が2回と，月6回皆で集まれることを喜ぶ声もある．また，念仏には資格を取るための試験や，年数会の大会があり，それらを目標に練習している人もいる．

念仏をきちんとした形で残したいとの思いの高まりから，現在の奉仕会会長が回り念仏のときに唱えられている念仏と和讃を集めた冊子を作成した．これにより，従来は耳で聞いたものを記憶するしかなかったが，いまは目でも覚えられてとてもよいと好評である．

念仏を唱える人の心を占めているものは，いったい何であろうか．

「昭和40年頃までの人，70才代くらいまでの人は村で生まれ，村で育ってきたから先祖の供養のためという思いが強いが，現在は村の外から嫁ぐ人も多いので，先祖の供養という意識はしだいに薄れていくのではないだろうか．でも浅間山大和讃（付録）の最後の“今ぞ7日の念仏は　末世に伝わる供養なり　慎み深く唱なうべし”とあるようにこの村がある限りつづけて行くべきものだ．」(70代女性）

「和讃は残していかなければならない．きちんとした形で供養したいために念仏の冊子を作った．先祖が自分の足元に眠っているかもしれない．先祖を供養するのは当然のことだ．」(80代男性）

「念仏は新宅では行わないことが多いが，その家の人たちが65歳ぐらいになったら行うのが一般的である．先祖の供養なので，奉仕会に入会したり，念仏も行うのが普通だ．」(70代男性）

「念仏を唱える会は，この地がすべて焼かれ，人々がこの下に埋まっているから，それを供養するために行われている．」(60代女性）というように多くの人は供養の気持ちから参加している．

「みんなで集まるのは楽しみだ．楽しみの要素はあるが，供養はこの地に生まれたからにはしなければならないものだ．みんなで念仏を唱えるだけでなく，ご飯を食べたり，昔のことを話したりするのも供養になる．」(80代女性）

「みんなで集まるのは親睦になって良いことだ．家から出て，みんなに会うのは楽しみ．ゲートボールもやって，練習会・本番・奉仕会とあるから忙しいのよ．元気なうちは続けたい．忙しくしてるから，若くいられる．」(70代女性）

純粋に念仏を唱えることに楽しみを見出している人もいる．

「念仏をやっていて一番の楽しみは，早く覚えたいという気持ちがあるから．覚えたつもりでも，つい冊子を見てしまう．早く覚えたいので，練習

会も頑張っている.」(60代女性)

「12年前からやっている. 当時は20人くらいで先生についていた. 師範を目指して頑張っていたが, 準師範を取ったところで講師の先生が亡くなってしまった. その頃には5人くらいに減ってしまった. 先生はとても厳しくて, よく怒られたし, 試験も厳しいものだったが, 刺激になった. いまは仲間が増えて良かった.」(70代女性)

最近は50代くらいの人も回り念仏に参加するようになってきた. 仕事を休んでまで参加する人もいて, 噴火から200年たっても回り念仏はなお盛んである.

§5 考 察

観音堂奉仕会にしても, 回り念仏にしても人々の心の根底にあるものは供養の気持ちであるように思われる. この地で生まれ, 育ち, 結婚する. 土地に対する執着心がとても強い. また親から子へ受け継がれるものが多く, 先祖を大切にする伝統的な家制度も色濃く残っている. そういった環境だからこそ, 先祖に対する供養の気持ちが生まれやすいのだろう. しかも発掘に携わっていて, 自分たちの足もとの土地から先祖の遺体が発見されるのを目にして, その気持ちは強さを増しただろう. 同じような気持ちの人が集まって同じ目的の活動をしているから, 必然的に団結力が生まれ何十年何百年続く活動になっているのではないだろうか. そして, 強い家制度も力を貸して次の世代へと受け継がれていく.

回り念仏では, その家の嫁が料理を作ってもてなすことが当然とされている. 鎌原全体での暗黙の了解である. 姑のいる家庭で病人がいるなどの特別な事情がない限り, 回り念仏を受けない家庭も, 嫁が準備をしない家庭もない. そのうちに嫁も回り念仏に参加するようになる.

奉仕会は65歳になった人に声をかけ, 周囲の人が参加を促す. 友達と同じグループになれるということで抵抗なく参加する. スムーズに参加できるようにレールが敷かれている. 鎌原の人にとっては, このレールをたどることが普通である. そこに参加して, はじめて地域に受け入れられる. そこに入らないものは変わり者の目で見られるてしまう. これは, 活動を継続するには有効だが, 個人の自由を妨げて, 異分子を集団から排除するしくみである.

活動が続いているのは, 被災記憶の伝承以外のレクリエーション的要素が加わっているからだ. このことは回り念仏よりも, 奉仕会に色濃い. 回り念仏では「供養のために」の声が多かった. 一方, 奉仕会では供養のためという声に加えて他にも理由を口にする人が多くみられた. 観光地化されている鎌原での活動は世間の注目を集めている. 見られている意識も大きな要因だろう. 会社勤めを退職したあと, 自分の居場所をこれらの活動に見出しているようだ.

また, 何十年, 何百年も続いている事実が鎌原の人たちの誇りになっている. そして, 続けていかなくてはの気持ちを駆り立ててもいる. 活動継続の強い気持ちを持って皆が集まっているので, その気持ちがさらに高められている.

ただ, これからは, 鎌原以外で生まれ育ったり結婚を機にこの土地に来た人や, 天明三年のことをあまり知らない人が増えていくだろう. 世間からの注目もだんだん薄れつつあるようだ. 参拝客は減少傾向にある. このような悪条件の中でこれまで通りに続けていくためには, 工夫が必要だろう.

過去を知り得るものが, それを人々に伝え共有し, 未来に伝えていく. この鎖があったから現在まで鎌原での活動は継続している.

謝 辞

調査に協力してくださった観音堂奉仕会会長の山崎己代治さんをはじめとする鎌原のお年寄の方々, 嬬恋村歴史資料館でたくさんの資料をもとに助言をくださった館長の松島栄治先生, 原稿を読んでアドバイスをくださった関戸明子先生(人文地理学), 井上洋先生(政治学)には, お忙しいなか時間を割いていただきました. ここに感謝の意を表したいと思います.

文 献

嬬恋村村史編集委員会, 1977, 嬬恋村史下巻, 2353p.

萩原進, 1982, 天明三年浅間山噴火史, 鎌原観音堂奉仕会発行, 75p.

鎌原区・鎌原観音奉仕会, 1992, 天明の災輝く恩恵, 87p. 嬬恋村歴史資料館で頒布

清水寥人, 1982, 緑よみがえった鎌原, あさを社,

156p.
田村知栄子 早川由紀夫，1995，資料解読による浅間山天明三年（1783 年）噴火推移の再構築，地学雑誌，104，843-864.

付録　浅間山噴火大和讃

帰命頂礼鎌原の
月の七日の念仏を
由来を委しく尋ぬれば
天明三年卯の年の
四月初日となりければ
日本に名高き浅間山
俄かに鳴動初まりて
七月二日は鳴り強く
夫れより日増しに鳴りひびき
砂石をとばす恐ろしさ
ついに八日の巳の刻に
天地も崩るるばかりにて
噴火と共に押し出し
吾妻川辺銚子まで
三十二ヶ村押通し
家数は五百三十余
人間一千三百余
村村あまたある中で
一のあわれは鎌原よ
人畜田畑家屋まで
皆泥海の下となり
牛馬の数を数うれば
一百六十五頭なり
人間数を数うれば
老若男女諸共に
四百七十七人が
十万億土へ誘われて
夫に別れ子に別れ
あやめもわからぬ死出の旅
残りの人数九十三
悲しみさけぶあわれさよ
観音堂にと集まりて
七日七夜のその間
呑まず食わずに泣きあかす
南無や大悲の観世音
助け給えと一心に
念じ上げたる甲斐ありて
結ぶ縁もつき果てず
隣村有志の情けにて
妻なき人の主となり
主なき人の妻となり
細き煙を営みて
泣く泣く月日は送れども
夜毎夜毎の泣き声は
魂魄子の土に止まりて
子供は親を慕いしか
親は子故に迷いしか
悲鳴の声の恐ろしさ
毎夜毎夜のことなれば
花のお江戸の御本山
東叡山に哀訴して
聖の来迎願いける
数多の僧侶を従えて
程なく聖も着き給い
施が鬼の段を設ければ
残りの人々集まりて
皆諸共に合掌し
六字の名号唱うれば
聖は数珠を爪ぐりて
御経読誦を成し給う
念仏施我鬼の供養にて
魂魄無明の闇も晴れ
弥陀の浄土へ導かれ
蓮のうてなに招かれて
心のはちすも開かれて
泣き声止みしも不思議なり
哀れ忘れぬその為に
今ぞ七日の念仏は
末世に伝わる供養なり
慎み深く唱うべし
南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏

明治初年　滝沢対吉原作
鎌原司郎補正
（萩原 1982 より）